

# 平成30年度 学校評価表

品川区立豊葉の杜学園

校長

二宮 淳

豊葉の杜学園校区教育協働委員会

委員長

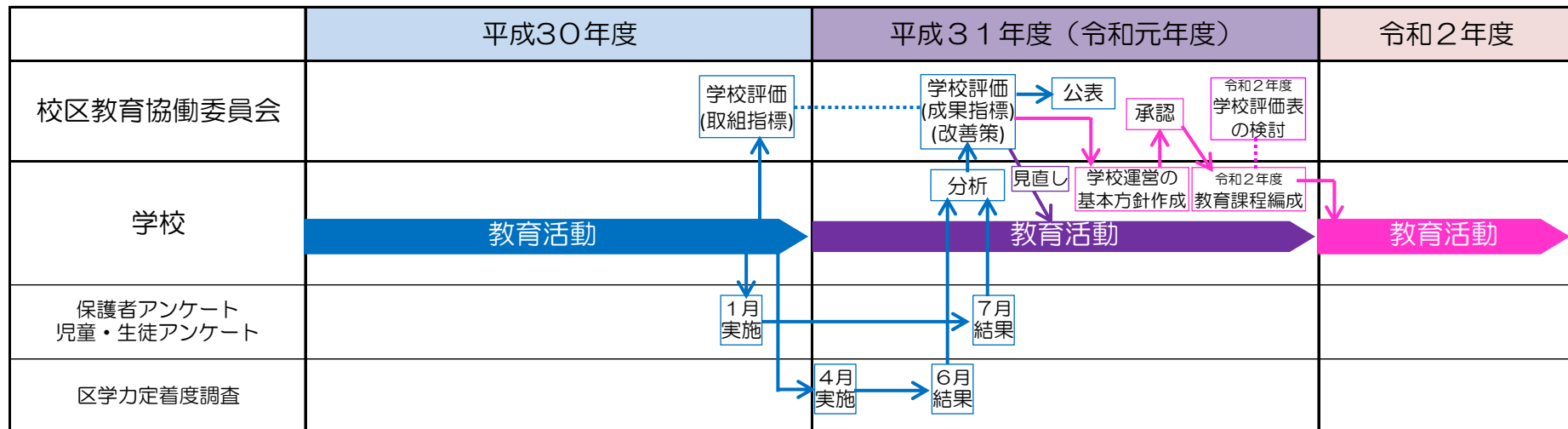
澤野 由紀子

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 平成30年3月30日教育長決定要綱第7号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

**学校評価の流れ**（※平成30年度の学校評価が平成31年度（令和元年度）および令和2年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



評価項目1 (学力に関すること)

重点目標		○義務教育9年間を通して、確かな学力の定着と伸長を図り、義務教育の出口である9年生の進路を確実に保証する。	
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明	
①	区の学力定着度調査の各教科の平均正答率が区の平均正答率を上回るようにする。	今年度は、区の平均正答率を全ての教科で上回ったのは、5、7、8、9年の4学年である。2年生は国語と算数、3年生では国語、4年生では算数と理科、6年生では算数が区の平均正答率を下回った。	B
	1、指導法や指導形態、教材、板書を工夫して授業を行う。保護者アンケートにおける「教師の姿」の肯定的評価を85%以上にする。	12月に実施した教員向け学校評価(自己評価)で、「よくあてはまる」と答えている教員が昨年度と比較して着実に上がっている。保護者アンケートにおける「教師の姿」の肯定的評価について、ほぼ90%達成した。	A
	2、全学年で「豊葉の杜タイム」を計画的に実施し、基礎基本の定着を図る。	基礎学力の定着のために、年間計画を立て1-4年生(国、算)5-9年生(国、算・数、英)に分けて朝の帯の時間を使い、学年毎に計画を立てて、実施した。	A
	3、CSを活用した補習教室や全学年による夏季補習、8年生の勉強会、9年生の合格塾を計画的に実施する。	未来塾、考査前補習、夏季補習、8年勉強会、9年合格塾を実施した。様々な放課後補習教室を実施するにあたり、保護者向けに事前にお便りを配布するとともに、メール配信を活用して周知する等、発信を工夫したことで、昨年度よりも参加者が増加した。	A
	4、家庭学習を習慣付ける。1~6年生は、宿題を毎日提示する。7年生以上は、「学習ブック」を用いて自学自習を定着させる。	1~6年生に宿題を毎日提示するとともに、5~9年生に対しては、学習ブックを活用し、児童生徒の自主学習の促進を図ることができた。また、後期課程の生徒の学習状況を分析し、教員間、児童生徒、保護者に家庭学習に関する情報を提供することで、自主学習への意識を高めることができた。	A
5、読解力を付けるため、読書活動を推進する。学校図書館における一人あたりの年間貸出冊数を昨年度の1.5倍以上にする。	目標の一人あたり1.48倍とおおむね1.5倍という結果であった。一人あたりの年間貸出冊数は、1~9年生全体は昨年度の1.2倍であった。特に後期課程は、昨年度の9.65倍に上がった。これは、図書委員の活動や授業内での活用の成果と考える。	B	
②	児童生徒による「学習の5項目」の自己評価の平均が全学年、4段階で3.5ポイント以上にする。	「授業の始めと終わりのあいさつをきちんとしている」「名前を呼ばれたら返事をしている」「先生や友達の話をきちんと最後まで聞いている」の項目については、3.5ポイント以上であった。課題であった「次の学習準備を事前に行う。」については、3.4ポイントであったが、前年度と比べて0.1ポイント上がった。	B
	日々の授業の中で全教員が「学習の5項目」を指導する。7月と2月に調査を行い、定着状況を把握し、指導の徹底を図る。	日々の授業における学習の5項目の指導について、「よくあてはまる」と答えている教員が昨年度と比べて上がっている。全教員で共通理解の下、指導を行うことで、学習規律が守られ、児童生徒は落ち着いて学習に向かうことができています。	B

今後の課題と改善策

【課題】  
1~9年生までの系統性のある学力向上に向けた取組

【改善策】  
①校内研究のテーマを引き続き、学力向上にして、指導方法の共通理解を図りながら、授業改善を行う。  
②4~9年生で週1回、算数・数学の放課後補習を設定し、基礎・基本の確実な定着を図る。  
③「豊葉の杜タイム」の使用教材をそろえる。算数・数学においては、ベーシックドリルや学習ソフトを活用し、系統的に学習できるようにする。国語においては、1~7年は漢字ステージを用いる。8、9年生における使用教材及び英語科についてもそろえて実施する。  
④「学習ブック」を5年生から使用し、自学自習の意識を醸成する。  
⑤引き続き、土曜授業日の豊葉の杜タイムは、全校体制で読書を行う。読書喚起を意識した図書委員会の活動の充実を図るとともに、落ち着いて読書に親しむことができるような環境を整える。

【課題】教員の統一した指導体制の確立

【改善策】「次の学習準備を事前に行う。」の項目については、全教員で具体的な準備の仕方について共通理解を図り、指導の徹底を行う。「丁寧な言葉遣い」に関しては、日頃より、人権教育の視点からも、まず教員が自ら手本を示す。市民科を活用し、しっかりと指導を行うとともに、アンケートを実施し、変容をみていく。

評価項目2 (人間性や社会性に関すること)

重点目標		○義務教育9年間を通して、よく考えて行動できる児童生徒、心豊かで望ましい人間関係を築ける児童生徒を育成する。 ・傾聴力とともに、よく考えて行動できる力を育成する。 ・全教育活動を通して、礼儀作法、ルールやマナー、「生活の5項目」を身に付けさせ、規範意識を醸成する。 ・「自律」や「自立」「公德心」「向上心」につながる市民科の自己管理・道徳実践・自他理解・コミュニケーション能力等を育成する。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	児童生徒による「生活の5項目」の自己評価の平均が全学年、4段階で3、5ポイント以上にする。	「正しい言葉遣いで話をする事ができる」は、3、4ポイントであり、それ以外の項目について、3、5ポイント以上であった。特に「身だしなみ」「公共物を大切にする」に関しては、3、9ポイントと肯定的な回答の割合が高かった。	B	【課題】 学年間や学級間における指導の統一化 【改善策】 「正しい言葉遣い」に関しては、まず教員が自ら手本を示す。全教員に配布されている「共通生活指導事項」に基づいた一貫した指導体制の徹底を行う。また、生活指導の情報交換を毎朝確認していく。
	日々の学校生活の中で、「生活の5項目」を指導する。7月と2月に調査を行い、定着状況を把握し、指導の徹底を図る。	日々の「生活の5項目」の指導について、「よくあてはまる」と答えている教員の数値が昨年度の結果に比べて上がっている。全教員で共通理解を図り指導を行うことで、児童生徒は落ち着いて生活できている。	B	
②	生活アンケートにおける「学校生活は楽しい」の項目で肯定的評価を85%以上にする。	生活アンケートの「学校生活は楽しい」という項目において、「そう思う」「どちらかというと思う」の回答は、ほぼ90%以上の達成であった。学年によってやや不安が残る学年が見受けられたので、改善策をもとに課題解決を行う。	B	【課題】 年間を通した教育活動のさらなる工夫 【改善策】 ①主体性や積極性を育てる学級活動、交流活動、学校行事のやり方や内容を工夫し、さらなる活動の充実を図る。 ②部活動においては、部活動ガイドラインにそって指導方法を工夫し、計画的に実施する。
	所属感や連帯感のある学級をつくるために、自治的活動領域や人間関係形成領域についての市民科授業の充実を図る。	市民科の各指導領域については、年間指導計画と全体計画に基づき、各学年で系統的な指導を行った。特に自己管理領域、人間関係形成領域については、本校で直近3年間実施した校内研究の学びを活かし、効果的な指導を行った。	A	
③	地域貢献の一環として、昨年度以上に児童生徒が地域と関わる教育活動を増やし、ボランティアマインドを育成する。	児童生徒会、地域活動部を中心に、区民まつりに参加したり、地域清掃を自主的に行う等、地域貢献を行った。また、7年生においても、町会と共に地域清掃を行った。これらの取組を通してすすんでボランティアに参加しようとする心情をはぐくんだ。	A	【課題】地域と関わる教育活動の充実 【改善策】 地域清掃や防災活動、区民まつりへの参画等、様々な活動を通して、地域や各町会との信頼関係を構築している。今後は、児童生徒会の地域における清掃の企画・運営を充実させるとともに、地域活動部等における地域清掃についても範囲を広げつつ、さらなる活動の充実を図れるようにする。活動を通して、地域社会の一員としての自覚を高めつつ、役割を果たせるようにする。
	1、各教科や市民科、防災学習日などで、地域の方々を講師として活用するとともに区民まつりなど、地域行事に積極的に参加させる。	今年度「地域における文化・歴史学習」では、今年度から市民科の授業として4年生で品川上水、8年生で権現太鼓に関する講話や実演を実施した。7年生の「しながわドリームジョブ」においても多くの地域の方を講師に活用した。「区民まつり」では、ボランティアや模擬店の出店等、積極的に参加を促し、地域からも喜んでいただいた。	A	
	2、地域の一員としての自覚をもたせるために、あいさつ運動やボランティア活動、高齢者施設訪問などを行う。	児童生徒会が中心となり、あいさつ運動を実施した。6年生が杜松ホームを訪問し、交流を行う活動を通して、高齢者を思う気持ちが育まれた。また、地域活動部が、放課後、同施設内の「二葉つぼみ保育園」の園児の世話をするなど、地域に関わる教育活動に多く関わっており、地域の一員として貢献した。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目3 (体力・健康に関すること)

重点目標		義務教育9年間を通して、健康の保持増進および体力の向上を図る。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	全国体力・運動能力調査において、全学年で合計得点が東京都の平均を上回る。	全国体力・運動能力調査において、4年生は、ほぼ東京都の平均、5年生は平均を下回った。後期課程については、合計得点が東京都の平均を上回ることができた。	B	<b>【課題】</b> 体力の向上を高める指導の工夫 <b>【改善策】</b> ①課題であった「ソフトボール投げ」の改善策として、ボールを使った体育の学習の際に、全力でボールを投げる機会を増やし、体全体を使った大きなフォームで投げるような運動を取り入れる。 ②品川独自の「スポーツトライアル」を年間通して行い、体力向上に努める ③運動会、わくわくスポーツタイム、クラブ・部活動などでねらいや目標を明確にして、効率のよい練習を行う。 ④ワミニッツエクササイズを活用し、運動の日常化、体力の向上を図り、運動に親しむ態度を身に付けさせる。また、保護者の運動に対する意識についても啓発する。 ⑤年間を通して水泳指導を行い、泳力・体力の向上を図る。
	1、体育や保健体育授業を通して、運動することの楽しさや必要性を教えるとともに運動する習慣を身に付けさせる機会とする。	専門知識を有するテクニカルアドバイザーや体育講師の活用により、運動量を確保するとともに、個に応じたきめ細かい指導を行い、体力と技術・技能の向上を図った。	A	
	2、ねらいや目標を明確にして、スポーツトライアルやワミニッツエクササイズ、わくわくスポーツタイム、クラブ・部活動などを行う。	スポーツトライアルでは、体ほぐし運動として日々の授業の導入に取り入れている。ワミニッツエクササイズでは、長期休業中に宿題としても取り組むようにした。わくわくスポーツタイムでは1-4年生の縦割り班を作り、実施している。部活動では大会等を目標に計画を立て、日々の練習に取り組んだ。	A	
	3、自主性や協調性ととともに、一生懸命に取り組む姿勢や態度を育てるために、やり方や内容を工夫して運動会を実施する。	5~9年生では、実行委員会や応援、色別競技等、1~4年生の運動会では、交流種目等、内容の工夫を行い、運動意欲を高めつつ、運動に親しむ資質・能力をはぐくんだ。各クラスの朝練や、学年練習の練習についても実行委員が考案し、自主的な練習になるように工夫した。6年生のSTAFFの帽子を着用しての運営のサポート等、義務教育学校としての特色を出しつつ、自主性をはぐくんでいる。	A	
②	児童、保護者の学校評価における、オリンピック・パラリンピック教育に関する活動についての肯定的な評価を85%以上とする。	トップアスリートとの交流を通して、スポーツへの関心を高め、運動することの楽しさを一人一人が実感することができるようになった。保護者アンケートのオリンピック・パラリンピック教育に関する活動についての肯定的な評価は、95%を超えた。	A	<b>【課題】</b> 「スポーツ志向の普及・拡大」を重点的な取組内容にした上での他の資質の育成への拡大 <b>【改善策】</b> ①オリンピック・パラリンピック教育では、アスリートとの交流や体験教室を通じて、運動する楽しさや特性に触れるとともにチャレンジ精神や生き方を学べるようにする。 ②引き続き、オリンピック・パラリンピック教育における世界ともだちプロジェクト「学習・交流国」を中心に世界の国々に興味をもち、すすんで関わろうとする心情を育てていく。 ③日本の伝統的な文化や芸能のよさを実感させ、相互交流や発表の場で発信できるように授業を工夫する。
	1、アスリートとの交流や体験を通じて、運動する楽しさや特性に触れるとともにチャレンジ精神等、生き方を学ぶ。	多方面で活躍しているトップアスリートを講師に招聘し、講話やスポーツ教室を通して、スポーツへの関心を高め、運動することの楽しさを一人一人が実感することができるようになった。	A	
	2、アワード校として4つのアクション「学ぶ、観る、する、支える」活動を実践し、学校だよりやホームページで取組を発信する。	アワード校として「スポーツ志向の普及・拡大」を重点的な取組内容にしつつ、幅広く教育活動を展開し、5つの資質を計画的・継続的に育成した。トップアスリートによる講話やスポーツ教室の交流をはじめ、様々な取組を学校だよりやホームページ等で発信した。	A	
	3、オリンピック・パラリンピックメニューの提供や給食の食材に触れる活動等を通して、国際理解を深めるとともに食に関する興味・関心を高める。	一月に一度、給食で「オリパラワールドメニュー」を提供し、様々な国の食文化を児童・生徒に周知した。また、子どもの日や七夕、節分等の5節句の給食を提供したり、郷土料理も提供したりしつつ、食に関する興味・関心を高めた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目4 (いじめの防止の取組に関すること)

重点目標		○義務教育9年間を通して、人権教育を徹底し、児童生徒の健全な心を育成する。 ・いじめの定義の正しい理解に基づく確実な認知の徹底を図り、高い危機意識で指導する。 ・いじめ対応委員会の機能を強化し、いじめの早期発見に努める。いじめの発生時には、教職員間の情報交換を密にし、関係機関や保護者等と連携して組織的にいじめ問題に対応する。 ・全教育活動を通して、心の教育を充実させるとともに、思いやりあふれる学級、学年、学校にする。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	生活アンケートの「友だちと仲良くしている」で「そう思う」「どちらかというと思う」の回答を全学年85%以上にする。	生活アンケートの「友だちと仲良くしている」での肯定的な回答は、全体として95%を超えている。しかし、学年によりおおむねそう思うと答えた割合の方が高い学年もあった。	A	【課題】 仲間を大切にできる豊かな心や人権教育の充実  【改善策】 ①班活動や当番活動、行事への取り組み方など学級経営の工夫を図る。 ②児童・生徒会や委員会活動を活発にする。全校で取り組むキャンペーンや運動をさらに展開する。 ③市民科において、心(道徳的実践力)を育てる授業を計画的、継続的に行うとともに、いじめの未然防止に力を入れる。 ④スクールバディや保護司の話等、外部講師を活用して学習内容の充実を図る。 ⑤人権教育の更なる充実を図り、相手を思いやる心情をはぐくむ。
	1、「いじめ根絶宣言」や「SNSほうようルール」を実践させ、いじめのない学校をつくる。	児童生徒会役員が中心となって朝会や総会、ブロック朝会などで、いじめのない学校、命の大切さを呼びかけるとともに、定着・継続を図れるよう定期的に振り返りを行なった。	B	
	2、全ての教育活動を通して、仲間を大切に、良好な人間関係をつくる。	市民科の授業や学校行事などを通して、学級の仲間を大切に指導を行った。その結果、児童生徒の活躍する場面が多くなり、学校全体が落ち着いている。	A	
	3、人権教育の一環として、標語やポスターの作成など行う。また、命の大切さやSNSに関するセーフティ教室を行う。	「命を守る授業」を発達段階に応じて各学年で実施した。標語やポスターについては、4学年～9学年で作成している。セーフティ教室は1～4年は、連れ去り防止、5年はネットトラブルについて、6・7年はSNSについて、8年はいじめ防止プログラム、9年は自殺防止プログラムで実施した。発達段階に応じた内容で実施した。	A	
②	「いじめや不登校の児童生徒ゼロ」を目標に、予防的な指導や早期発見、解決に努める。	生活アンケートを年に2回、ふれあい月間を6月と11月、区のおいじめ実態調査と不登校調査を毎月実施している。また、学年毎にいじめの件数や不登校の人数、傾向を記載し、生活指導主任に口頭でも伝えている。それを元に管理職と生活指導主任で、週1回の生活指導報告会で児童生徒の情報交換した後、全職員にも情報共有しながら、対応している。	A	【課題】 いじめの未然防止に対する取組の強化 不登校対策における学年ごとの指導の格差 いじめや不登校の児童生徒に対する教員の意識改革  【改善策】 生活部及び環境部の特設委員会を中心に組織が動けるようにする。 ①いじめ対応委員会の機能を強化させ、ケース会議を通して情報の共有化を図る。 ①学年体やケース会議の場で、不登校について教員同時で報告や相談ができるようにする。 ②特別支援コーディネーターが中心に外部機関と連携し、校内委員会で課題解決を図る。 ③不登校傾向のある児童生徒の早期発見に努め、スクールカウンセラーや巡回相談員等との連携を強化し、担任だけでなく組織を活用して不登校児童生徒の解消に努める。
	1、市民科の授業を使って、自己管理と人間関係形成領域の6つのスキルを身に付ける。	市民科では、自分も他人も大切に指導を行った。市民科授業地区公開講座も実施し、今後も周りの人と良い関係を築き、すすんで関わろうとする能力を育てている。行事等で活躍する児童・生徒が多くなってきた。	A	
	2、いじめ対応委員会が中心となり、いじめの実態を把握するとともに、発生時には組織的に迅速かつ的確な対応を行う。	生活指導報告会ではスクールカウンセラーと木・金曜日に情報交換している。週1回、学年の様子を生活指導主任に報告し、いじめや不登校を未然に防ぐとともに、状況によっては、いじめ対応委員会で迅速に対応できるようし、解決に向けて対応した。	A	
	3、保護者会や校区教育協働委員会、地域健全育成運営協議会等を使って家庭や地域に情報を伝え、緊密な連携・協力・支援体制をつくる。	いじめや不登校についての相談機関の紹介、未然防止に向けての対策やスクールソーシャルワーカーの活用について情報交換を行ってきた。外部機関との連携についての理解を深めることができた。校内におけるケース会議は、年間20回ほど開催した。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成